

西チベット=ラダック地方 のディグン派

ルチアーノ・ペテック
金子良太 訳

(I)

'Bri-guñ-pa 派は bKa'-brgyud-pa 学派から分立した四支派の中の一派である。Phag-mo-gru-pa の弟子で無学文盲の苦行僧 Mi-ñag sGom-riñs が 1167 年に建立したディグン僧院の名に因んでディグン派と呼ばれているが、同派の実際の開祖というべき人はディグン法主 'Bri-guñ Dharmasvāmin と呼ばれた 'Jig-rten-mgon-po (1143-1217) であった。開宗当初からディグン派は宗門の最高権威としての座主と、軍民両権を掌管して行政を司った sgom-pa 或は sgom-chen と呼ばれる司政者をいただく結束した強固な組織を構成していた。この組織構造は 1073 年以来 Sa-skya の地に樹立され素晴らしい成功をおさめた Sa-skya-pa 派の組織を手本としたものである。チベット史料中には座主は通常 gdan-rabs という名称で記録され、この座主の地位は Ral-pa-can 王の末裔であると自称していた 'Brug-rgyal sKyu-ra 氏一門の世襲により継承されたが、キュラ家血縁の者という規定以外、継承に関するより厳しい条件は何も存在しなかった。

13世紀になるとディグン派は政治面でチベットの命運を完全に分担するような立場に立ち、サキャ派の歴代管長と主導権を争うことになるが、この抗争は 1290 年にモンゴル支援軍を得たサキャ派がディグン僧院を襲撃破壊するという惨事を引き起すまで続いたのである。ディグン派はその後この打撃から徐々に立ち直っていった。この事実は 15 世紀になると明朝がディグン派の影響力とか威信などを確認し同派座主 (gdan-rabs) に対し八大教王の一つとしての闍教王という称号を授与したことから知られる。とはいえディグン派が政治上重要な役割を演ずることはもう二度となかった。16 世紀初頭ディグン派は再度復興の萌しを見せたものの、その後内訌により弱体化し、1581 年の熾烈な内戦は最終的に同派のもつすべての世俗的権力を失わせる結果をまねくに至った。同

時にディグン派宗義も rñiñ-ma-pa 派の強い影響を受けて変化した。⁽³⁾

西チベット地方のディグン派
ベテック

しかし本論ではそれらのことはさておきディグン派が少なからず異彩を放つ役割を演じた西チベット地方における同派の弘通問題に限って概観してみることにする。ディグン派のこの地方における拠点は終始一貫してマナサロワール湖 Manasarovar とカイラーサ山 Kailāsa をめぐる地域であった。この地域はヒンドゥー教徒・仏教徒・ボン教徒にとり等しく聖地であり巡礼の目的地である。⁽⁴⁾ Padma-sambhava は暫時この地に逗留したといわれる。11世紀前半 Atiśa (983-1054) が布教した「仏教後伝」(phyi-dar) 時代になると、宗派に所属しない雲水の苦行僧たちがこの地の洞窟や岩間に禪定の場を求めようになった。このような傾向が伝統として絶えることなく定着するようになったのは Mi-la-ras-pa (1040-1123) の時代からである。伝承によればミラレパはボン教徒の加持行者 Na-ro Bon-chuñ と術を競ったすえ相手を折伏し、カイラーサ山を仏教徒のために勝ちとりその地の洞窟で暫時禪定したと伝えられている。⁽⁵⁾

ミラレパ時代から数世紀の間この聖なる山と湖地方の領主であり仏教庇護者であったのは Gu-ge および Pu-rañ の諸王である。両者とも吐蕃王家の血筋であるが吐蕃王朝崩壊後10世紀初頭に西遷して来たものである。グゲ即ち Shañ-shuñ 王国はマナサロワール湖の西北西に位置し「仏教後伝」の揺籃の地となった所である。この王国の法王 Lha bla-ma Ye-śes-'od と法王 Byañ-chub-'od とは Rin-chen-bzañ-po (958-1055) の訳経事業や布教活動を援護し、⁽⁶⁾ グゲを「仏教後伝」揺籃の地となさしめたのである。マナサロワール湖の南に位置するブラン王国は初代ブラン王だけが初代グゲ王より上位の序列におかれたものの、その後のブラン王国は力において弱小でありグゲに従属する立場におかれていた。

第五十九卷
二三三

ミラレパの時代以降はカイラーサ山周辺の草庵は殆んどミラレパの系統に属するカギュ派の苦行僧たちに占められていた。そして後にカギュ派から更に数派の支派が分立した時代になると、その中の 'Brug-pa 派とディグン派とがカイラーサ山との関係を保持するようになったのである。伝承によると両派の共通の師にあたる Phag-mo-gru-pa (1110-1170) は両派の開祖であり弟子である Gliñ-ras-pa および 'Jig-rten-mgon-po に対し、カギュ派にとっての三大聖地 Tsa-ri, La-phyi, Gañs-ri に苦行と禪定を修行する者たちを派遣するよう命じ、二人の開祖は師 Phag-mo-gru-pa のこの要請に応えた。この事はまずカイラーサ山次いでマナサロワール湖地区への宗教的理由にもとづく一種の入植化現象である人口の移動をもたらすことになった。Gliñ-ras-pa はカイラーサ山に弟子 'Brug-pa Ye-śes-rdo-rje を派遣した。次いで著名な弟子 rGod-

tshañ-pa mGon-po-rdo-rje (1189-1258) がカイラーサ山の Go-shul 窟に1213年から1217年の間住み、其処にドゥク派修行僧が常住できる設備を整えた⁽⁷⁾。彼の後はその弟子で遊行僧として知名な O-rgyan-pa Rin-chen-dpal が引き継いだ⁽⁸⁾。かくしてドゥク派の此の地における存在は以後絶えることなく続いたのである⁽⁹⁾。

'Jig-rten-mgon-po も師の命を遵奉し三回にわたり次々と修行僧の一团をカイラーサ山の洞窟に派遣した。第一団の長は Ñañ-phu-pa (-1206) であり、第二団は gÑos-chen-po と Gar-pa Byañ-rdor の兩名に引率されていた。この時期は多分13世紀初頭のことであったと考えられる。最も重要なのは第三回派遣団で、彼が73才(1215年)のとき通称 Ghu-ya-sgañ-pa と呼ばれる dÑos Chos-rje Phun-tshog-rgya-mtsho を団長にして送り出した一群の修行僧である。この一行は途方もないことに55,525人の修行僧(ri-pa)で構成されていたといわれる。かくして Ghu-ya-sgañ-pa の一行は聖カイラーサ山の周辺にディグン派存在の基礎を確立したのである。Śel-'dra とか Ñan-ri とか Dar-luñ などの地点に禅堂 sgrub-khañ が造られていった⁽¹⁰⁾。

彼等の事業はグゲ王国の法王 Khri bKra-śis-lde-btsan や, Mañ-yuñ ラダックの王 Lha-chen dÑos-grub-mgon や, プラン王国の王 Bla-chen sTag-tsha-khri-'bar やその子 gNam-mgon-lde 王の援助をうけて進められた⁽¹¹⁾。此の点に言及している素材のままの史料は大変貴重な価値をもつものである。というのは13世紀初頭の西チベット王朝史上最も必要とされる年代的ピンポイントを提供して呉れているからである。ラダック史上の問題は近く刊行される拙著の中で充分検討し尽くしているので此処では扱わない。ただ Lha-chen dÑos-grub-mgon が「ラダック王統記」(La-dvags-rgyal-rabs) の王統表に含まれていることを申し添えるだけで充分と思う。此処で最も興味深い問題といえばグゲ諸王の名前と称号の問題である。すでに Tucci 氏により提示されたように此の時に少し先だってグゲ王国の治所が Ya-tshe (Ya-rtse) に遷されるという変化が起った。Ya-tshe の地は西ネパールの Jumla 近郊の Semjā (現在 Sijja) に比定される。この遷都は Dullu にある Pṛthivimalla に関するサンスクリット語碑文の中に名を記されている Cāpilla 王すなわち bTsan-phyug-lde 王の治世当時行われた。これが所謂西チベットと西ネパールにわたり領土を拡張したマルラ王国 (Malla) の起源となったものである。我々は「Dullu 碑文」に記されるサンスクリット語王名と「王統記」に記録されるチベット語王名との二種の対応する王統表を手にするのである。斯くして Cāpilla/bTsan-phyug-lde 王の子は Krāśicalla/bKra-śis-lde であり、多分 Khri bKra-śis-lde-btsan と同一人物であったらうということが判るのである。ともかく完全

な形の姓名と称号は一つの作業仮説を成立させる。即ち初期のグゲ王達は退位し得度し僧名を名乗ってからも依然として国政に係わりをもちつづけた。このようなことは当り前のことであったし慣例的なことであったのである。Ye-śes-'od 王や Byañ-chub-'od 王も全く同様であり、ずっと降って18世紀にもこのようなことがあったことは「ラダック王統記」に当時の一人の王が chos-rgyal du soñ (法王となられた) と述べられている事実からもわかるのである。⁽¹³⁾ 丁度これは日本の院政を想起させる制度といえる。今回挙げた例でいえば当時のグゲ王は在位中は -lde で終る三音節から構成された名前を使用した。そして譲位して法王となったときに四音節から成り -btsan で終る僧名をもったと思われる。そして古代チベット諸王名の形式にならって此の僧名の前に Khri- を添えたのである。⁽¹⁴⁾ つまり1215年乃至それ以降グゲには譲位してから法王の位に即位した者が出たということで、在位時の Krāścilla/bkra-śis-lde 王は後に法王となり Khri bkra-śis-lde-btsan と名乗ったのである。彼のあと王位を継承した者の名前は史料に現われないが多分法王の子 Krādhicalla/Grags-btsan-lde が即位したものであろう。

次にプラン王二人に就いていえば、最初の王は譲位し法王となった人のようで、二人の名前は「Khojarnath 案内記」にみることができる。ラダックやグゲと同様古代プラン王国の歴史は全く暗黒につつまれ、この「案内記」もその点に関しては殆んど役立つ所はない。我々はただヤツェのマルラ王朝が滅亡するとともにプラン王が代って襲位し治所を Pu-rañ から Ya-tshe に遷したことを知るのみである。

此処で本論ディグン派の問題に戻るが Ghu-ya-sgañ-pa は修行僧達を結束した一団に組織したうえで、これをディグン寺座主のもとから派遣されてきた僧院長 (rdor-'dsin) の指揮下に置いたのである。Ghu-ya-sgañ-pa は僧院長の職務僧院兼住持処として、カイラーサ山の南側の峡谷に rGyañ-grags 僧院を建立した。この寺院は今日でもカイラーサ地方におけるディグン派の本山として残っている。⁽¹⁶⁾ この本山から Ghu-ya-sgañ-pa は修行者 (ri-pa) たちの精神生活を25年前後にわたり指導監督したのである。⁽¹⁷⁾

このような所謂集团的参籠があつてから二三年も経過しないうちに 'Jig-rten-mgon-po の弟子達が聖山に向つて旅立った。最初の人物は gÑos Lha-nañ-pa (1164-1224) で Lha-nañ 草庵を建てた人であるのだが、より大切なことはカイラーサ山の東に rDsu-'phrul 祠堂を建立したことである。この祠堂は嘗つて Mi-la-ras-pa が Na-ro Bon-chuñ と術を競い合った当時使用した僧房の上に建てられたものである。⁽¹⁸⁾ 'Jig-rten-mgon-poのもう一人の弟子はGrub-thob Señ-ge-ye-śes で、彼は Śel-'dra の地で三年間禅定を行い其処で rGod-

tshañ-pa に邂逅してゐる。彼はブラン王 sTag-tsha (この王は1215年の sTag-tsha-khri-'bar と同一人物であることは明らかである) とその子 A-tig に戒を授け返礼に祠堂や僧房を建てる土地を貰うけた⁽¹⁹⁾。

彼より少し遅れて sPyan-sña Śes-rab-'byuñ-gnas (1187-1241) が訪れ、カイラーサ山に1219年から1225年まで逗留し、Bya-skyibs 寺院と Dar-luñ 寺院を建立した。彼は Ghu-ya-sgañ-pa 同様現世的な事柄にも心を配つたらしい。ブラン王 A-tig に法力と秘儀を伝授し返礼に Kho-char lha-khañ 仏堂を与えられている。これが Khojarnath 寺院であり近年まで西チベット地方における巡礼の主要目的地となっていた有名な寺院である。sPyan-sña が Khojarnath 寺院に止錫した当時、Mon Ya-rtse 'Dsum-lañ の王である mÑa'-bdag Grags-pa-lde が母の葬送のためマナサロワール湖畔にでかけている。Grags-pa-lde は Dullu 碑文に記されている Krācalla であり、Krādhicalla/Grags-btsan-lde の後継者であり、またインド碑文から1223年に即位したことが判明する。彼は sPyan-sña に法に就いて疑義を質し、その結果 sPyan-sña を自己の根本導師 (rtsa-ba'i-bla-ma) として崇めることと自らディグン派の庇護者となることを誓約した。王と sPyan-sña の対話は通訳を介して行われた。これは Ya-tshe 諸王が全くチベット語を話さなかったことを意味するが、実際にすべての碑文がサンスクリット語で書かれている事実がこれを裏付けている。sPyan-sña は治所 Ya-tshe に招かれ、その近郊に仏堂若干が建立された。後 sPyan-sña はマナサロワール湖西側に戻り暫時禪定したのちディグン寺に帰った。

これら一連の人物の聖域への来錫とそこでの活潑な行動は宗門的観点からも或は世俗的観点からも、ディグン派の影響力を強め同派の確固たる基盤を西チベット地方にかためるのに役立ったものといえる。その功績は主として25年もの長期間カイラーサ地方に留錫し活躍した Ghu-ya-sgañ-pa に負う所が多い。彼の後を継いでこれを更に発展せしめたのは僧院長 rdor-'dsin Ñi-ma-guñ-pa で、彼はグゲ王 Khri bKra-śis-dbañ-phyug とその子 dpal-mgon-lde に法を授け、rGyañ-grags 僧院維持の資として広大な寺領 (chos-gshi) を貰い受けた。これにはブランの dKar-sdum にある Phu-g-yu 洞窟などの諸窟が含まれている。此処で触れた王二人はグゲ王統表に名前が記載されていない。「王統表」に二人を組み込む年次の余地がなかったためと考えられる。即ち我々は1251年頃と1270年と1274年頃との三碑文に記載されている Asokacalla/A-so-lde が Krācalla/Grags-pa-lde の後継者であった事実を確認できているからである。⁽²¹⁾ Khri bKra-śis-dbañ-phyug とその子 dPal-mgon-lde とは、実際はブラン王またはヤツェを治所としたマルラ王国チベット区 (これは古代グゲ王国

に相当する地域で、当時はヤツェのマルラ王朝に内附していた地区)の王であったと思われる。この仮説は第一に dKar-sdum (この町は今日でもプラン地区の主要市である)に就いての記述により、次ぎに「Khojarnath 案内記」記載の類似した名前 (Khri bKra-sis-rgyal-po-lde とか Khri bKra-sis-stobs-btsan-lde など) に関する記述により裏付けられ支持されると思う。いずれにせよこれら諸王は1225年から1250年代の王と考えるのが至当であろう。

次の僧院長 rdor-'dsin Kun-dga'-rgyal-mtshan は、グゲ王 Khri Grags-pa-lde とその王妃 bSam-grub-rgyal-mo によりプランの rGyal-di (rGyal-ti) 城に招かれ、プランの上下 Thañ-yab 地区の土地を与えられている。この王を1223年の Grags-pa-lde と同一人物と見做すことには無理があり、我々は再び Ya-tshe のマルラ王朝の宗主権下に内附したであろうグゲ王とかプラン王とかを考えてみなければならない。

僧院長 rdor-'dsin Dar-ma-rgyal-mtshan はディグン寺第5代座主 gCuñ Rin-po-che (1211-1279, 座主職1255-) 当時の人である。ディグン派の殷盛はその極に達していた。西部チベット mÑa'-ris sKor-gsum 地方の峡谷には、ディグン派の修行僧が溢れ、本山 rGyañ-grags 僧院のみならず、末寺 (dgon-lag) の寺領もプラン地方 Gro-śod 地方 Kunawar 地方にわたり、寺蹟も Khojarnath, Ñan-ri, r Dsu-'phrul, Ri-bo-rtse-brgyad というように増大していった。⁽²⁴⁾

この時代から第11代座主 'Dsam-gliñ chos-kyi-rgyal-po (1335-1400, 座主職1351-) の時代までは西部チベットにおけるディグン派の地位は損われることなく安泰であった。これは mÑa'-ris sKor-gsum, Kunawar および Ya-rtse 'Dsum-lañ 諸王の庇護があったからである。同派の僧数は常に500人を下ることはなかった。Ya-rtse 諸王に就いての言及は別の史料にも確められるが、その史料によると1300年頃ヤツェを統治した Ānandamalla 王はディグン派庇護者であったとある。

しかし当時すでにディグン派の衰退は始っていたのである。第11代座主から第16代座主に至る15世紀の極く短い期間に、ディグン寺の規律と学风は急激に下降していった。必然的にカイラーサ地方に出かける修行僧たちも減少をたどったのである。⁽²⁷⁾ この結果西チベット地方におけるディグン派僧侶の数は余りにも減少し、同派の僧院や草庵を維持する員数にもこと欠く事態をまねいた。Ñan-ri とか Bya-skyibs とか rDsu-'phrul などは一時的便宜として 'Brug-pa 派の修行僧に貸与し使用して貰うことになったが、時の経過とともに最後は彼等の所有に帰してしまっただ。⁽²⁸⁾

ディグン派衰退の傾向は一方では政治的条件の変化により一層いちじるしく

なった。15世紀初頭に A-me-dpal は Glo (又は Blo-bo) sMon-thañ 王国 (現在のネパール国ムスタン地方) を樹立し、Ñor 寺創建者であるサキヤ派学僧 Kun-dga'-bzañ-po (1382-1457) の助力を得て仏教を導入しその地に弘めた。

「Khojarnath 案内記」によると A-me-dpal 王の後継者は A-mgon-bzañ-po である。「カイラーサ山案内記」(Ti-se gnas-yig) によればこの王は Khojarnath をディグン派から取り上げて Ñor 派の Kun-dga'-bzañ-po に贈与したと記されている。この事件は1447年 Kun-dga'-bzañ-po の第三回目の Glo sMon-thañ 来錫の時の出来事と考えられる。このような処置をとるといふことは Glo-bo の王が同時に Pu-rañ の領主であった場合にのみ可能なことと解釈できよう。「Khojarnath 案内記」によると A-mgon-bzañ-po の後継者は Tshañs-pa bKra-śis (別の写本では bKra-śis-mgon)⁽²⁹⁾ であった。この bKra-śis-mgon は或る意味で卓越した人物であったが、その資料は寡なく文献中に散在する程度にとどまる。1469年彼はサキヤ派因明学者 Śākya mchog-ldan (1428-1507) の檀越となった。その10年後にはツェンの瘋癲聖者 gTsañ-smyon Heruka (1452-1507) を Glo-bo に迎え入れている。bKra-śis-mgon 王は彼等をラダック Mar-yul や、当時のチベット最高権力者 Rin-spuñs への Glo-bo からの使者につかった。王は同様に Dol-po ラマ bSod-nams-blo-grod (1456-1521) の祖父や父親をラダック Mar-yul や Rin-spuñs への Glo-bo 国使として任用し派遣している。これらの史料は bKra-śis-mgon に対し確かな年次の根拠を与えるもので彼は大体1465年から1480年の間在位していたことになる。「カイラーサ山案内記」も彼のことに触れているが称号や背景を誤って記し、彼はグゲ王でディグン寺第16代座主 Kun-dga'-rin-chen (1475-1527, 名義的座主職1484-、実質的座主職1518-) 時代の人であり第16代座主の檀越であったと記述している。これは計算上あり得べからざることで、この不可能事の記述が次いでグゲ王 bSod-nams-lhun-grub やグゲ法王 Blo-bzañ-rab-brtan やプラン代官 (sde-pa)⁽³²⁾ Kun-bsam などが第16代座主の檀越であったと列挙する無理につながっている。彼等のうち Blo-bzañ-rab-brtan のみが他史料に徴証できるが、彼は宗喀巴の弟子の Ñag-dbañ-grags-pa の檀越であった事実から15世紀前半に在世した人物であることがわかる。それゆえ彼が bKra-śis-mgon と同時代の人とするには早すぎるし、それ以上に第16代座主の檀越であったとするには無理がある。代官 sde-pa Kun-bsam に関しては、プランが一時 Glo-bo に服属したにせよ間も無く離反してグゲに内附し、封臣となって代官 sde-pa の統治を受けたと史料が伝えているのである。

Glo-bo 国の bKra-śis-mgon 王の後継者は A-señ であり、この時代に瘋癲

聖者は再度来錫しているが、これは1488年直後のことと考えられる。この年に聖者は「ミラレパ尊者歌謡伝」を編輯し世に送っている⁽³⁴⁾。

西チベット
ラダック
地方の
ディグン
派

A-señ の後継者は bDe-legs-rgya-mtsho であり、彼の治世のとき第三回目であり最終回となった瘋癲聖者の来錫があった(1500年頃)。聖者は rGyañ-grags 僧院に僧院長の賓客となり暫時逗留した。この時折悪しく Glo-bo 王 bDe-legs-rgya-mtsho と Pu-rañ 王 bTsun-sñan-grags との間に長年争われ⁽³⁵⁾、この繋争は「瘋癲聖人伝」の著者により詳述されているが、「カイラーサ山案内記」はこの点についても誤った記述をしている。「案内記」はこの戦いの時期を第11代座主から第16代座主の間、いわゆるディグン派退潮期の出来事とし、Khojarnath 寺院が 'Brug-pa 派に譲渡される以前のこととしている。我々は1896年編著「カイラーサ山案内記」の著者が各種の事項を混合させたり、それら相互の辻褄合せを手持ちの資料補足で行ったと認めざるを得ない。

ベテック

没落の道を辿るディグン派を再建するための真摯な努力が1518年から1527年の間第16代座主により払われた。彼は戒定慧の修学を鼓吹し修行僧300人を西チベットに送り出すとともに新たに僧院長を任命し、その後順次四名の僧院長を rGyañ-grags に派遣した⁽³⁷⁾。

rGyal-dbañ Ratna の時代になると、即ち第17代座主 Rin-chen-phun-tshogs (1509-1557, 座主職1529-1534) の時代に一人の傑出した人物がカイラーサ山地方の僧院長として赴任した。lDan-ma Kun-dga'-grags-pa である。彼は Blo-bzañ-rab-brtan 王の曾孫にあたり、1540年から1555年の間グゲ王として在位した 'Jig-rten-dbañ-phyug の庇護を受けた。プラン代官 bSod-nams-rab-brtan も彼の檀越であった。lDan-ma は彼等の根本導師となり、ディグン派が以前失ったいくつかの寺領を還付して貰ったのである。彼は rGyañ-grags 僧院を修復再建し、プランから多数の弟子を修学のためディグン僧院に送り出した。端的に言えば彼は阿里地方におけるディグン派の活動に新鮮な刺戟を与えたのである。彼は生涯の後半期にラダック王の招請をうけいれて Mar-yul に移住した⁽³⁸⁾。ラダックにおける活躍については省略するが、勿論彼の出国がグゲ地方のディグン派の繁栄にとり大打撃となったことは想像に難くない。

以後これ以上のディグン派の発展をみることはなかった。第18代座主 Rin-chen-rnam-rgyal (1507-1565, 座主職1536/1558-) のもとに任命された僧院長は、ラダック王 'Jam-dbyaṅs-rnam-rgyal (c. 1590-1616) の庇護をうけることになった。カイラーサ山はラダック王領ではなかったが以後の僧院長はこの王の庇護を享受したのである。この場合も「カイラーサ山案内記」には年次記述の矛盾があり、その説明も欠如している。そして第21代座主 Chos-rgyal-

第五十九卷
二一七

phun-tshogs (1547-1602, 座主職1583-) の時代にグゲ王が再びディグン派を庇護する檀越として登場してくる。即ち bKra-śis-mgon 王と Khri Grags-pa-bkra-śis 王である。⁽³⁹⁾ 前者について述べている資料は全く存在しない。後者は1630年ラダック民族に王位を追われたグゲ最後の王で、イエズス会宣教師節アンドラーデを保護した bKra-śis-grags-pa-lde 王の名前を倒置した形の名前に似ているように思われる。この想定が正しければ彼は16世紀末にはすでに王位についていたことになる。「カイラーサ山案内記」が屢々事実を錯誤する過ちを犯しているにも拘らず、「案内記」を根拠にこのような想定を行うことは許されることかもしれないが、しかし我々はなおかつこの事実について懷疑してみることを求められていると考える。

17世紀初頭の状態については初代パンチェンラマ Blo-bzañ Chos-kyi-rgyal-mtshan(1570-1663)がカイラーサ山地方を訪れたことによって僅かな記録が残されたに過ぎない。第1代パンチェンラマは1618年グゲ王の要請で故郷を訪ねカイラーサ山地方を巡礼した。4月23日(6月16日)聖湖の岸辺に到達しディグン派僧院長の出迎えをうけた。大聖パンチェンの来錫によりカイラーサ山上に現れた奇瑞に驚歎した僧院長は、大聖者に対しその来駕を深謝した。⁽⁴⁰⁾ この事実はディグン派の組織や施設が当時もなお損われずに残存していたことを物語っているといえる。

1630年になると11世紀以降初めてのことであるが政治情勢の変化を見た。カイラーサ山地方はラダック王 Señ-ge-rnam-rgyal (1616-1642) の支配下に置かれた。この王はディグン派援助は続けたものの明らかに中途半端な庇護の仕方であった。又、経済的社会的退潮がグゲ王朝の滅亡に続いて起ったため、ディグン派僧徒の活動も沈滞した。その後は一名の修行者もディグン寺から派遣されることがなく、カイラーサ山における瑜伽行の実践に終末を告げたのである。⁽⁴¹⁾

最終的変革はその50年後に起きた。短期間ラダック人がグゲを支配したあとで、モンゴル將軍 dGa'-ldan-tshe-dbañ がラサの黄教ゲールク派政権のために、1679年から1680年にかけてグゲを征服し、1684年の和約にもとづき西チベット地方をダライラマに譲渡した。この会戦のあと將軍は暫くカイラーサ地方に駐留したが当時の rGyañ-grags 僧院長は將軍を表敬訪問し、前に失った rGyañ-grags 僧院所属の祠堂を返還して貰い、また若干の荘園を寺領として授与されて、ディグン派資産をふやしている。一般にあって、1680年代には rGyañ-grags 僧院とその末寺は第5代ダライラマと摂政 Sañs-rgyas-rgya-mtsho および將軍 dGa'-ldan-tshe-dbañ から或る程度の援助をうけていたのである。しかしその後ラサ政府はディグン派祠堂への援助を停止した。少なくとも「カ

イラーサ山案内記」は第5代ダライラマ以降、「案内記」著述の年(1896)に至るまで僧院長の継承は中断せず続いたと述べるだけに止まり、カイラーサ山地方の有様については全く記するところがない。⁽⁴²⁾

Ya-tshe のマルラ王朝のようなディグン派の一方の檀越は14世紀末に崩壊した。グゲ王国は再び独立を回復したが、王国内のネパール地区はより一層ヒンドゥー文化の影響下に入っていた。⁽⁴³⁾ 或る時期 Sijapati 即ち Jumla 諸王はチベットと宗教的に連帯していた時代があった。この地の仏教徒最後の王は17世紀末の Vikrama Śāh とその子 Narasiṃha で彼等は仏教に帰依し仏教を庇護した。1667年から1679年にかけて Narasiṃha 王は度々ダライラマのもとに遣使している。彼以後の Karañja 王や Viṣṇurāja 王は正統ヒンドゥー教徒であり、仏教に敵意さえ抱いていた。この状態は1789年にネパールのグルカ王朝が Jumla を征定し併合するまで続いたのである。⁽⁴⁴⁾

(II)

すでに観察したようにディグンとラダックとの接触はむしろ早い時期に始まったもので Lha-chen dños-grub-mgon 王が Ghu-ya-sgañ-pa の活動を援助した1215年に溯るものである。ラダック人の沙弥たちが更に修学し比丘となるためには中央チベット地方に赴かなければならないことを義務づけた有名な規則⁽⁴⁵⁾、それはラダック地方の文化的進展の上に逆効果をもたらし哲学的宗教的思惟活動の中核(僧院)の発展を実際には妨げた一法規を王に施行するよう促したのは多分ディグン派の影響によるものであったと思われる。この出来事以降両者間の交流に関して言及している記録は何もなく、3世紀以上にわたって全く交流がなかったと推論してもよいと思う。

カイラーサ山地方におけるディグン派基盤の確立は同派首脳の活躍に負うものであり同地方のディグン派がディグン寺首脳の支配下に留まっていたのに対し、ラダック地方のディグン派は私的働きを通して確立されたものであり、歴代ディグン寺座主が直接ラダック地方のディグン派寺院を統轄したわけではなかった。検討した限りではラダック地方にディグン派を伝えたのは、bKra-śis-rnam-rgyal 王(c.1555-1575)の招聘を受け rGyañ-grags 僧院から身をひきラダックに来錫した Chos-rje lDan-ma Kun-dga'-grags-pa の働きであった。従ってこの件の年次は1550年代末のことと見て差し支えないであろう。lDan-ma Kun-dga'-grags-pa は bkra-śis-rnam-rgyal 王の根本導師となり Leh の西北にあたる Phyi-dbañ の近くに sGañ-sñon bKra-śis-chos-rdoñ 僧院を建立した。lDan-ma の伝記が皆目入手できないのは洵に残念なことであるが、筆者が sGañ-sñon 僧院を訪ねたとき告げられたように実際彼の伝記は今迄何

(46)
一つ書かれていなかったのである。

ラダック王室へのディグン派の影響力は極く短期間続いただけのように見うけられる。1593年に第21代ディグン寺座主が Mañ-yul 即ちラダックの王に公式親書を送ったのだが、⁽⁴⁷⁾王室は程無く 'Brug-pa 派の影響下に入ってしまう、ディグン派はその地位回復を王朝末期に至るまで計り得なかったからである。

この概観描写で書き落している一重要事項がある。今日のラダック地方には sGañ-sñon 僧院以外のディグン派の中心寺院に g-Yuñ-druñ dgon-pa 僧院があり、この寺院は一般に間違いである呼称 Lamayuru という寺名で知られている。伝承では Nāropā および Rin-chen-bzañ-po に結びつけられる紛れも無い bKa'-gdams-pa 派創建の寺院であるが、文献上も伝承上も Lamayuru 僧院が何時カーダム派からディグン派に移行したか、その年次に就いての証拠は何一つ無いのである。これは dÑos-grub-mgon 王の時代であったかも知れないし、同様に lDan-ma の時代のことであったかも知れない。ともあれ Lamayuru 僧院と sGañ-sñon 僧院はラダック地方のディグン派二大柱石として存続したのである。

衰微したディグン派の影響力は18世紀末に至り多少回復した。これは第6代 rTogs-ldan 活仏の活躍に負うものである。この活仏系譜の初代 Phun-tshogs-dar-rgyas は Koñ-po 地方に出生し第17代ディグン寺座主 (1509-1557) の弟子となった人であるから16世紀中葉の人である。彼はラダックとは何の関係ももたず生涯の大半をコンボ地方で過した人である。第2代活仏もコンボ地方出身の人でありディグン派を東部チベット地方に弘める責任を果たした人物である。第3代・4代・5代活仏は中央チベット地方に活躍の場を移した人たちである。第6代活仏 rTogs-ldan Rin-po-che bsTan-'dsin-chos-grags は中央チベット地方出身で後藏 Śag-ram-dgon の僧院長を或る時期務めたのちラダックに移り sGañ-sñon 僧院の住持となった。彼は Tshe-dbañ-rnam-rgyal 王 (1760-1783) および Tshe-brten-rnam-rgyal 王 (1783-1802) のお抱え宮廷導師 (dbu-bla) となり王家に強い影響力を及した人物である。のちに彼は中央チベット地方に帰りディグン近郊の裕福な Yañ-ri-sgar 僧院の住持に任ぜられディグン寺座主他界ののちは座主職代行も務めたのである。第7代活仏 Ñag-dbañ-dge-legs-dbañ-phyug も中央チベット地方出身の人であり、悲運な 'Jigs-med-kun-dga'-rnam-rgyal 王子のもとでお抱えの宮廷導師となった。王子は mChog-sprul の名でも知られる人で1830年頃から父王の摂政役も分担し、ドグラ軍のラダック侵攻を前に逃走し1835年英印領内で逝去した。第7代活仏はその後インド巡礼に旅立ち Mandi 地方の Padma-can 湖の畔りに至り享年25才で入滅した。ラダック王家と活仏系譜との関係は第8代 rTogs-ldan 活仏 Ñag-

dbañ-blo-gros-rgyal-mtshan のとき頂点に達した。第8代は mChog-sprul 王子の御子として出生したのである。彼は Yañ-ri-sgar 僧院に学び立派な碩学となり同僧院で得度受戒した。ラダックに立ち戻ってから Lamayuru 僧院と sGañ-sñon 僧院修復の業を遂げている。ラダック前王朝とトクデン活仏系譜間の親縁関係は第8代活仏をもって終焉したのである。第9代活仏は北部ラダック地方の極く平凡な家庭の出身で1881年活仏の座に迎えられたが彼の入寂の年次は明らかでない。現活仏は第10代 rTogs-ldan Rin-po-che⁽⁴⁸⁾ でラダック地方最高の碩学の一人であり能化の一人でもある。

斯様な西チベット地方ディグン派の歴史は中・近世時代における二位的宗派の推移する命運を典型的に表徴している。輝かしいサキヤ派やゲールク派の経歴は勿論のこと、'Brug-pa 派の業績とさえも比較さるべきものでもないのだが、ディグン派は控え目ながらグゲ地方やラダック地方で教化の一部を担う貢献を果たし、また大本山ディグン僧院が破壊され能化たちがインドに逃避したのちも、グゲ地方ラダック地方で今日も教化の業をすすめているのである。

略語表

BA= *Deb-ther-sñon-po* (青冊); G. N. Roerich, *The Blue Annals*, Calcutta 1949-1953.

PRN=G. Tucci, *Preliminary Report on Two Scientific Expeditions in Nepal*, Rome 1956.

Santi=G. Tucci, *Santi e briganti nel Tibet ignoto*, Milan 1937.

Ti-se= *Ti-se gnas-yig*. 註(4)を参照されたい。

註

- (1) ディグン寺に就いては A. Ferrari, *mKhyen-brtse's Guide to the Holy Places of Central Tibet*, Rome 1954, pp. 111-112. および G. Tucci, *Tibetan Painted Scrolls*, Rome 1949, pp. 16-17, 253. 参照。
- (2) 16世紀までのディグン寺座主に就いては佐藤長「明代チベットのリゴンバ派の系統について」東洋学報45-4, pp. 434-452. 参照。
- (3) 佐藤長「明代チベットの八大教主について」東洋史研究21-3, pp. 295-314; 同 22-2, pp. 203-225; 同 22-4, pp. 488-503. 参照。
- (4) カイラーサ山にまつわる伝承は、1896年第34代ディグン寺座主著 *Gaṅs chen po ti se dañ mtsho chen ma dros pa bcas kyi sñon byuñ gi lo rgyus mdor bsdus su brjod pa'i rab byed śel dkar me loñ* (以下 *Ti-se* と略す。)中に要約が収められている。残念な点は著者の引用し利用した

史料が散逸したことである。発見されればグゲ・ブラン史研究の貴重な資料となろう。第34代座主は1901年に「La-phyi案内記」を *gSañ lam sgrub pa'i gnas chen ñer bsh'i ya gyal Godāwari'am/'brog la phyi gañs kyi ra ba'i sñon byuñ gi tshul las rim pa'i gtam gyi rab tu phyed pa ñuñ du rnam gsal* の題で著している。La-phyi はエベレスト山近くの山中にありミラレバ修行の故地である。カイラサ山は世界屈指の美しい山であるがヨーロッパ人で訪れたものは少ない。同地域の祠堂や禪定所に就いて記述しているのは G. Tucci, *Santi e briganti nel Tibet ignoto*, Milan 1937 (以下 *Santi* と略す。) および Swami Pranavananda, *Kailas-Manasarovar*, Calcutta 1949; Do., *Exploration in Tibet*, Calcutta 1950. の三書があるが後者二書は我々の研究目的には殆んど役に立たない。

- (5) *Ti-se* および *mGur-'bum* 22章参照。H. Hoffmann, *Quellen zur Geschichte der tibetischen Bon-Religion*, Wiesbaden 1959, pp. 267-277; Do., *Mi-la-ras-pa: Sieben Legenden*, München-Planegg 1950, pp. 65-77. 参照。
- (6) G. Tucci, *Indo-Tibetica*, II, Rome 1933. 参照。
- (7) rGod-tshañ-pa に就いては *BA*, pp. 680-686, 700参照。Jalandhara への旅行に就いては G. Tucci, *Travels of Tibetan Pilgrims in the Swat Valley*, Calcutta 1940, text 89-92, tr. 15-26 (= *Opera Minora*, Rome 1971, pp. 376-382). 参照。Go-zul 寺 (mGo-tshugs 寺) に就いては *Ti-se*, fol. 58b-59a および *Santi*, p. 79. 参照。*Ti-se* によれば現存の Go-zul 寺は第10代ダライラマ (1816-1837) 時代に建立されたものである。
- (8) O-rgyan-pa の年次に就いては *BA*, pp.696-702 参照。鳥仗国への旅行は G. Tucci, *Travels...*, text 92-103, tr. 41-64 (= *OM*, 392-406). 参照。
- (9) *Ti-se*, fol. 23a-b. 参照。
- (10) *Ti-se*, fol. 23b-28a. 参照。Ghu-ya-sgañ 草庵に就いては *Ti-se*, fol. 39 b-40a. 参照。55, 525 という数表現は伝統的なディグン派の表現数字で、開祖 'Jig-rten-mgon-po の死も55, 525人の僧徒に見守られたと伝えられている。
- (11) *Ti-se*, fol. 28a. 参照。
- (12) *PRN*, pp. 46-66, 107-109, 112-116. 参照。これ等統治者に対し *Ti-se* は屢々称号 Ya-rtse 'Dsum-lañ rgyal-po (ヤツェ・ジュムラ王) を冠している事からしても Tucci 氏が Ya-tshe を Jumla 近郊の Sijja に比定する説は支持される。

- (13) *La-dvags-rgyal rabs*. 参照。A. H. Francke, *Antiquities of Indian Tibet*, II, Calcutta 1926, p. 44. 参照。
- (14) *PRN*, p. 63 に引用する Khojarnath *gnas-yig* に類似名がある。
- (15) *PRN*, pp. 62-63 参照。但し Khojarnath *gnas-yig* はグゲとラダックの統治者たちを Khri bKra-śis-dños-grub-mgon 一人に仕立てる誤謬を犯していると考えられる。
- (16) *Ti-se*, fol. 28b-29b. 参照。rGyañ-grags 僧院に就いては *Santi*, pp. 94-95. 参照。
- (17) *Ti-se*, fol. 29a, 54a-b. 参照。gÑos Lha-nañ-pa に就いては *BA*, pp. 601-602. 参照。rDsu-'phrul に就いては *Ti-se*, fol. 47a および *Santi*, pp. 110-112. 参照。
- (18) *Ti-se*, fol. 31a-b, 54b. 参照。Señ-ge-ye-śes は Sañs-rgyas-ras-pa の師であった。(BA, p. 975)。Śel-'dra に就いては *Ti-se*, fol. 40a-b. 参照。
- (19) *Ti-se*, fol. 29a-30b. 参照。Śes-rab-'byuñ-gnas に就いては *BA*, pp. 604-607. 参照。Bya-skyibs に就いては *Ti-se*, fol. 59b-60a. および *Santi*, p. 64. 参照。Khojarnath に就いては *Santi*, pp. 38-43. 参照。Krācalla の年次に就いては *PRN*, p. 67. 参照。*Ti-se* は Señ-ge-ye-śes より前に sPyan-sña Śes-rab-'byuñ-gnas が来錫したとするがそれは明らかに誤りである。Señ-ge-ye-śes のカイラーサ山参籠は rGod-tshañ-pa の留錫 (1213-1217) 時期と同じであり、一方 sPyan-sña の同地方逗留は 1219年-1226年にわたるものである。
- (20) *Ti-se*, fol. 31b. 参照。Kardam (dKar-sdum) に就いては *Santi*, pp. 52-54. 参照。
- (21) *PRN*, pp. 68-69. 参照。
- (22) *PRN*, p. 63. 参照。
- (23) *Ti-se*, fol. 31 b. 参照。
- (24) *Ti-se*, fol. 31b-32a. 参照。
- (25) *Ti-se*, fol. 32a. 参照。
- (26) *mKhas-pa'i-dga'-ston*, Ja, fol. 142a. 参照。Ānandamalla の年次に就いてはその兄弟 Jitārimalla (在位 1288-1290) とその子 Ripumalla (在位 1312-1313) の年次から大体の年次推定が可能である。L. Petech, *Mediaeval History of Nepal*, Rome 1958, pp. 81, 102-103, 108. 参照。
- (27) *Ti-se*, fol. 32a-b. 参照。明朝がディグン派に授与した称号によっても明白な同派の輝しい威信とは対照的な驚くべき事実である。
- (28) *Ti-se*, fol. 32b. 参照。

- (29) *Nor Kun-dga'-bzah-po* と *Glo sMon-thaṅ* 諸王との関係に就いては *PRN*, pp. 17-19. 参照。 *Ti-se*, fol. 32b. 参照。 *Nor Chos'byun*, fol. 176 b. 参照。
- (30) *gTsañ smyon Heruka phyogs thams cad las rnam par rgyal ba'i rnam thar*, fol. 34a. 参照。同書の影印本は *The Life of the Saint of gTsañ*, New Delhi 1969.
- (31) D. Snellgrove, *Four Lamas of Dol-po*, I, London 1965, p. 85. 参照。
- (32) *Ti-se*, fol. 32b-33a. 参照。
- (33) Lokesh Chandra 編 *Vaidūrya-ser-po*, pp. 221-222. 参照。G. Tucci, *Tibetan Notes*, *HJAS* 12 (1949), p. 485 (= *OM*, pp. 478-479). 参照。
- (34) *gTsañ-smyon He ru ka*, fol. 76a-77b. 参照。
- (35) *gTsañ-smyon He ru ka*, fol. 87b-98b. 参照。
- (36) *Ti-se*, fol. 32b. 参照。
- (37) *Ti-se*, fol. 32b-33a. 参照。
- (38) *Ti-se*, fol. 33a-b, 54b-55a. 参照。
- (39) *Ti-se*, fol. 33b. 参照。
- (40) 初代 *Paṅ-chen rnam-thar*, fol. 64a-65a. 参照。 *Byañ-chub lam rim gyi rim pa'i bla ma rnam par thar pa*, Ca, fol. 90b-91a. 参照。同書の影印本は *Biographies of Eminent Gurus in the Transmission of the Graduated Path*, II, New Delhi 1972.
- (41) *Ti-se*, fol. 33b-34a. 参照。
- (42) *Ti-se* fol. 34a-35a. 参照。攝政 Saṅs-rgyas-rgya-mtsho 著「第5代ダライラマ自伝補巻」 *Cha*, fol. 106b-107a. 参照。
- (43) *PRN*, pp. 129-130. 参照。
- (44) *Ti-se*, fol. 35a-b. 参照。ダライラマへの *Narasimha* 遣使の年次に就いては G. Tucci, *Tibetan Painted Scrolls*, vol. 1, Rome 1949, p. 74. を参照されたい。
- (45) *La-dvags rgyal-rabs* (A. H. Francke 本), p. 36, l. 9. 参照。
- (46) *Ti-se*, fol. 33a-b. 参照。 *La-dvags rgyal-rabs*, pp. 37-38. 参照。両書とも *IDan-ma* のラダック来錫を *bKra-śis-rnam-rgyal* 王治世当時とするのに対し、今日ラダックにつたわる伝承では *IDan-ma* は 'Jam-dbyaṅs-rnam-rgyal 王 (c. 1590-1616) の重病を治した人とし、従ってジャムヤン・ナムゲル王治世のとき来錫したものを見做している。この伝承は勿論年次上支持できないものである。
- (47) 影印本 *Miscellaneous Writings of 'Bri-guṅ Kun-dga'-rin-chen*, Leh

1972, 所収の第21代ディグン寺座主 Phun-tshogs-bkra-śis 伝記, fol. 311a. 参照。

- (48) D.Schuh 博士が報らせてくれた通り歴代 rTogs-ldan 活仏の家譜(gduñ-rabs) は現存する。しかし Schuh 博士も私もこの書を披見する機会に恵まれていない。従って rTogs-ldan 活仏に関する簡略な記述は専らラダック略史とでもいうべき dGe-rgan bSod-nams, *La dvags rgyal rabs blo dman rna ba'i dga' ston*, Leh 1966, pp. 85-96. より引用したものである。

[訳者補註]

本稿の原文は次の四種類の文脈において *gdan-rabs* という言葉を使用している。

- (1) From the very beginning the 'Bri-guñ-pas received a solid organization, with an abbot as the supreme spiritual authority..... In the historical texts the abbot is normally styled *gdan-rabs*,.....
- (2)in the 15th century the Ming dynasty of China actually recognized its influence and prestige by granting to the *gdan-rabs* the title *ch'an-chiao-wang*, as one of the eight "religious princes",
- (3)From this time till the period of the 11th *gdan-rabs* 'Dsam-gliñ Chos-kyi-rgyal-po (1335-1400, on the see since 1351).....
- (4) On the 'Bri-guñ-pa *gdan-rabs* down to the 16th century see H. Sato, "Lineage of the 'Bri-guñ-pa in Tibet during the Ming period",

訳者は原文(1)の意に沿い、一応以下いずれの *gdan-rabs* も座主と訳した。

(1)(2)(3)の場合は単数形、(4)の場合は複数形を念頭において便宜上座主と和訳したにすぎない。然し一方 *gdan-rabs* に関するベテック博士の見解に就いては疑義が残る。従って補註をもうけて訳者の理解を述べ御教示を乞う次第である。ここで問題になるのは(1)と(3)の解釈である。(2)と(4)は(1)の場合と同じ「*gdan-sa-pa* 座主」の意味で使用されているので(1)に含むものとする。著者の主張(1)「チベット史書では普通座主のことを *gdan-rabs* と呼ぶ……」という解釈は、寡聞にして史書に見出せなかった。*Deb-sñon* や *mkhas-pahi dgah-ston* 等ディグン派史をのべる史書や座主伝記に現れる座主に関係する用例は「...*gdan-sa-pa med* 座主は空位であった。」・「...*gdan-sar-bskos* 座主に任じた。」・「...*gdan-sar-byon*座主の座に就いた。」・「...*gdan-sar-mdsad* 座主を勤めた。」などが見られても、*gdan-rabs* を直接座主と呼ぶ用例を見出すことはできない。反対に(3)の *gdan-rabs* は *gdan-rabs bcu-gcig-pa*

'Dsam-glin Chos-kyi-rgyal-po 第11代座主ザムリン・チュキゲポという場合の *gdan-rabs* で、第何代座主某々というときは必ず *gdan-dabs* で表現し、決して *gdan-sa-pa* を用いない。従ってこの場合の *gdan-rabs* は *rgyal-dbañ sku-ḥphreñ bcu-gsum-pa* 第13世ダライラマなどという場合の *sku-ḥphreñ* と類似の機能を果していることがわかる。史書に見出される用例、即ち個々の座主を指す場合に序数を伴って使用される *gdan-rabs* を Petech 博士は *gdan-sa-pa* の意味に広義に解釈し、(3)を演繹し(1)を主張されたものと思う。一方 *gdan-rabs* は「*gdan-sa-pa* 住持者の *rabs* 歴代」をいい、転じてその記録を指すとし、意味もその範囲に限るとする解釈がある。これは *gdan-rabs* を *gdan-sa-paḥi-rabs* の縮形と見立てた解釈である。しかしこの形も史書に見出すことが出来ない。訳者は *Deb-sñon*, ña, 90b. などの史書に現れる *gdan-saḥi-rabs* が本来 *gdan-rabs* の語源であると思いたい。即ち *ḥbri-khuñ-gi gdan-sa-pa rnams-kyi nañ-nas gdan-(saḥi-) rabs bcugcig-pa.....* と考えて、初めて(3)の場合の *gdan-rabs* の正しい解釈が出来ると考える。

〔後記〕

ローマ大学教授 Luciano Petech 博士は、昭和51年11月30日より52年3月末日まで日本学術振興会の外国人研究者招聘に依り滞日し、東洋文庫を主に、東京大学・京都大学・大谷大学・東北大学でチベット史・ネパール史関係資料を研究され、その間、昭和52年3月12日、東洋文庫において「カイラーサ=マナサワル地方のディグン派」について講演された。本稿はその講演原稿の和訳である。